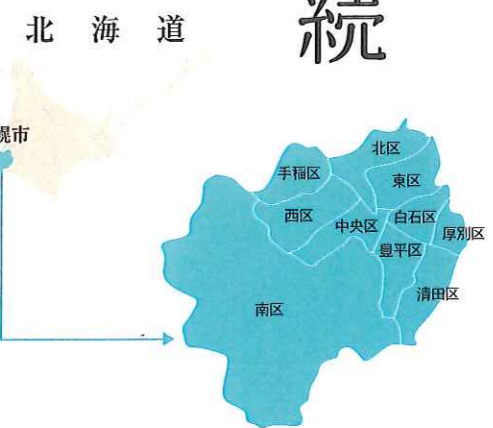


地域探究を機に生徒が始めた署名活動で閉校の体育館が存続

市立札幌藻岩高等学校の取り組み(上) 浦崎太郎 大正大学地域創生学部教授

札幌市南区を題材に探究的な学習に取り組む市立札幌藻岩高等学校。都市部にあり、1学年の定員は320名にも上る。国公立大学の合格者数も多い進学校だ。それまで地域と関係性の薄かった高校を連携強化に導いたのは、生徒の行動力だった。写真提供●市立札幌藻岩高等学校



北海道札幌市南区は同市の南西部に位置する広大な区だ。面積は全市域の約60%に及び、多くを山林が占める。人口136,928人(2020年6月1日現在)。大半は市街地に隣接するエリアに居住している。

未来に向けた新たな価値を創造・共創する人物の育成

進学校といえば、受験勉強で3年間を過ごすイメージが強い。しかし、市立札幌藻岩高等学校では近年、全ての生徒が授業の一環として地域と関わり、課題の発見や解決にあたる学習に力を入れている。

しかも、実践が深い。2019年度の2年生は、住宅地にヒグマが出没するという課題に立ち向かい、その解決策として山林の見通しをよくするための下草刈りに取り組んだ。

これまでこの連載で取り上げてきた大半が、地方の小規模高校だったが、今回は都市部の進学校による地域との連携にスポットを

当てる。

藻岩高等学校が連携に着手した背景は、ご多分に漏れず人口減少だという。

「札幌というところ、北海道全域から人が集まってくる都市という印象が強いかもしれませんが、札幌市でも15歳未満の人口は減少しており、中でも南区は減少率が高い区域です。その影響で、本校は間もなく1学年当たり2クラスずつ減ることになります。さらにその先は、現在市内に7校ある市立高校の再編も避けられない状況です。その際、真っ先に統廃合に遭うのは、本校ではないだろうか。となれば、学校の魅力が高めなくてはならない。そんな危機感を数年前に管理職や一部の職員が抱いていまし

た」と話すのは、同校の改革を実務面で牽引してきた教員の長井翔さんだ。こうした見通しに基づき、2016年度の半ばに学校改革を協議・検討する校内委員会が発足。2017年度は「MOT・P (Moiwa senior high school Tomorrow Project) 委員会」として本格的に活動を開始した。

最優先で進めたのは、育成を目指す人物像の明確化で、議論を重ねた末に「未来に向けた新たな価値を創造・共創する人物」という結論に行き着いた。

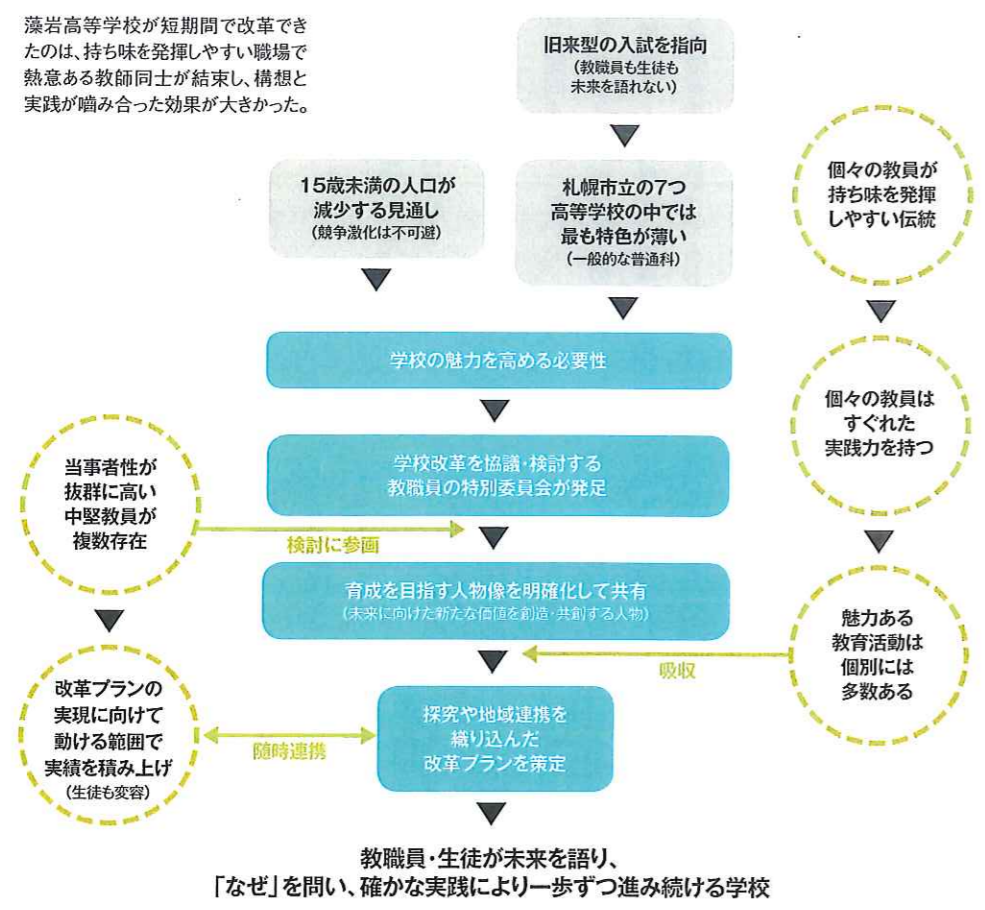
そのために「育成したい力とは何か」を検討し、教員内でのコンセンサスを共有する「ことばの力」「考える力」「思い浮かべる力」「試そうとする力」「やり抜く力」などに努めた。

ただ、こうした学校改革に向けた議論の必要に迫られた進学校は同校だけではない。一般的に現3年生(2018年度入学生)は、新たな制度での大学入試(大学入学共

通テスト)が2021年(令和3)から行われる。また、2022年度入学生からは「社会に開かれた教育課程」を掲げる新学習指導要領が導入される。

都市部のほかの進学校でも、学校改革の検討は行われている。しかし、藻岩高等学校校のような実践を伴った事例はほとんど聞かない。では、何が改革と育成を可能にしたのか。「それは本校の改革に意欲的な人材がいた点が大いと思います」(長井さん) 同校の職員間で継承されてきた「個々の

藻岩高等学校の改革の流れ



1 地元のリンゴを使ったアップルパイを開発し、地域のカフェで販売。焼き上げた50個は21分で完売した。
2 市立札幌藻岩高等学校は札幌市の中心街から南方に約10km、豊平川沿いにある。

Taro Urasaki
1965年岐阜県生まれ。岐阜県内で高校教師として学校と地域の連携について実践的に研究。2017年4月に大正大学地域構想研究所教授、20年4月より現職。地域創生学部で実習企画や学生指導を担いつつ、高校と地域が連携して人材育成と地元回帰を推進する仕組みの普及に尽力。文部科学省中央教育審議会学校地域協働部会専門委員を務めた。



裁量が及ぶ範囲の実践ならば、お互いを尊重し合う「雰囲気」を踏襲し、「未来を先取りした学びを自分たちが受け持つ生徒に提供したい」と意気込む教員が2人いた。いずれも2017年度の1年生を担当する保健体育科の教員、高木大作さんと千葉建二さんだ。

新学習指導要領の先取りで 探究的な学習に取り組む

2人は自ら実践することを念頭に、改革へ向けた動向を見守っていた。出番が訪れたのは2018年(平成30)のはじめだった。「MOT・P委員会」では、育成を目指す人物像が徐々に形づくられていた。

2018年度に2年生を受け持つ2人は、地域連携の必要性を感じ、実践のために先進授業への視察を行った。視察後、2人は地域に出て精力的に連携先を開拓する。スポーツでの関わりを通じて、まちづくりや福祉など活動の場を確保できた。生徒が地域に関わりはじめてから、形に表れるまでにはさほど時間はかからなかった。

「総合的な学習の時間」では班ごとにテーマを決めて学習を進めたが、例えばある班は、地元若者が集まる場所が少ないことを課題と捉えた。伸び伸びと運動できる場所があれば解決できると考え、閉校にな

った小学校の体育館を存続させる署名活動を行う生徒も現れた。

「地域に出ることで、これまでの受け身の授業に疑問を持つ生徒が現れました。改革に確信を抱きましたが、この実践がその学年だけにとどまり、学校全体の財産になっていなかった」(長井さん)

2018年の11月頃、改革の具体像が顕在化してきたが、職員や生徒からは戸惑いや抵抗があった。そこで、総合・探究ワーキンググループ(WG)が12月の職員会議で、2年生の実践を学校全体に広げることが提案。地域探究の必要性と可能性について、丁寧を示すことで承認にこぎつけることができたという。

「WGの提案が職員に受け入れられたのは、改革の先にある人物像を体現する生徒が現れたことが大きいと思います。それは、高木先生や千葉先生をはじめ、2年生の先生方が深い思いを持って生徒の指導に当たってくれたおかげです。委員会の議論と現場の実践が噛み合っていたからこそ、短い期間で成し遂げることができたでしょう」(長井さん)

持続可能なまちづくり 積極的に取り組む

その後、2年生の活動には「南区探究M



SP」という名称が付いた。そこには「藻岩高校の生徒が地域のことを知り、自分たちでできることを考え、地域との関係性を持ち、意見を交換しながらその計画を実行することで、地元南区が笑顔あふれる持続可能なまちになってほしい」という願いが込められている。(下図参照)

これと併せて、同校では3年間の学びを生活と密接に関わる(有機化)計画も具体化された。これまで不可能だと思われてきた都市部の大規模普通科進学校における地域連携。しかし、それはやればできるのだと藻岩高等学校は実証した。

次号では、同校にどのような生徒が現れ、学校がどう変わったのかを見ていく。

(以下次号に続く)

2年生で行った「総合的な学習の時間」のテーマ

南区探究 MSP

藻岩高等学校のある南区が、これからも笑顔あふれるまちであり続けるために、地域のことを知り、高校生ができることをみんなで考え、地域の人々と関わり、意見交換しながらその計画を実行し、持続可能な取り組み、持続可能なまちづくりに積極的に取り組んでいくことを目指す。

- M … 藻岩 (Moiva) × 南区 (Minami-ku)
- S … 笑顔 (Smile) × 持続可能 (Sustainable)
- P … 計画 (Project) × 人々が集う場 (Platform)

- 1 住宅地に出没するヒグマと共存する方策を探究し、隠れ場所となる草刈り取除を提案した生徒たちが実際に実習している様子。
- 2 ヒグマとの近接を防ぐために草刈りに至った経緯や実施した効果について、校外でのヒグマのイベント「ヒグマックス2019」で披露する生徒たち。
- 3 札幌市南区主催の「まちナカアートプロジェクト」で、地下構内を飾った美術部のチョークアート作品。



C O L U M N

「南区探究MSP」から得られたこと

「南区探究MSP」を通じて高校生はどのように変わっていったのか。関係者に聞いた。

多様な価値観を学び 未来を描く種に

千葉建二さん
市立札幌藻岩高等学校教諭

地域では人とつながると新たなつながりが生まれ、クモの巣のようにどんどん結ばれていきました。この2年間、そこに絡んだ生徒が多様な価値観を学び、自分の未来を描く種となることで、たくさん起りました。その生徒たちが自分の未来を具体化し、大人としてクモの巣に帰ってくる。そんな未来を地域の人とともに実現していきたいと思っています。

心揺さぶる地域の 人から学んでほしい

吉山直子さん
石山まちづくりセンター所長

藻岩高校の生徒たちは、一昨年の合併によって取り壊しが決まっていた小学校の体育館を署名活動を行うことで、地域の活動の場として存続する道を開いてくれました。その原動力は、経験から出るひらめきと瞬発力、枠にとらわれない柔軟な発想でした。今後も活動を通して、地域にいる心揺さぶる人から多くのことを学び、気付いてもらえたらうれしいです。

自然に湧き上がる 気持ちを形にしたい

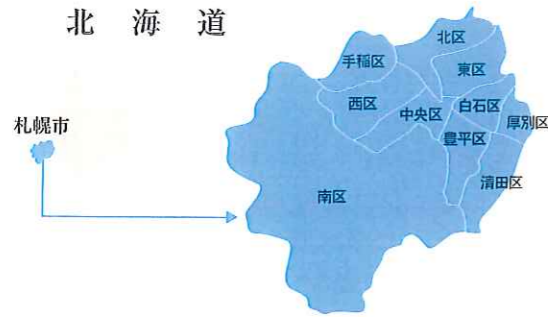
浜口由香さん
むくどりホーム・ふれあいの会

打ち合わせが始まると、生徒たちは場の雰囲気に打ち解けていき、多様な側面が引き出され、表情が生き生きとしてきました。関わった大人たちも、互いに心響き合う経験こそが、実は大事なのではないかと感じていました。共感からここで何かをしたいと動く熱量につながり、自然に湧き上がる気持ちを形にする。「南区探究MSP」をそういう場にしていきたいです。

藻岩高等学校の改革の軌跡

	学校改革に向けた調査・検討・協議	実践・成果
2016年度	●「藻岩高校の明日を考える委員会」発足	
2017年度	●「MOT-P委員会」に改編 (MOiwa senior high school Tomorrow Project) ●教育目標として「未来に向けた新たな価値を創造・共創する人物」を共有 ●保護者や地域との連携推進を明確化 ●1年担当者が地域連携の先進校を精力的に視察	●1年に配属された熱心な教員が機会をうかがう ●「この学年で改革に向けた試行をしたい」という思いをもって指導を続け、チャンスをうかがう ●帰校後すぐに連携先を地域で探し始める
2018年度	●「MOT-P委員会」の「総合・探究WG」が2年生の実績を主な根拠として、「南区探究MSP」(*)を今年度の2年生だけでなく、学校全体の教育活動に位置付けるよう提案 (WG:ワーキンググループ) ●管理職がこの方向性を了承・決定し、職員に報告 ●1・2・3年の内容が一貫性を持つよう再検討 *69ページの図参照	●2年生で「南区探究MSP」を試行し、手応えを得る ●学年で企画し、学年で実践(他学年は別個の動き) ●地域と関わって、「MOT-P委員会」が提示した通りの人物像に成長を遂げる生徒が出現する ●「主体的な学び」や「社会参画」への目覚めが見える化する ●報告会を開催▶1年生のときに戦略的に継承 ▶2年生になって地域へ積極的に飛び込んでいく生徒群が成立
2019年度	●「総合・探究WG」が「探究委員会」(探委)に改編 ●探委で全校分を一元的に企画し、各学年で実践 1年:ニセコ地域課題研究→北大環境講座→南区探究基礎 2年:「南区探究MSP」+ 職場体験 3年:ミライdesign・世界・地域・社会と自分自身の未来をデザインする	●「南区探究MSP」を経験した3年生がAO・推薦入試で今までにない実績を挙げる ●2年生の「南区探究MSP」で顕著な実績を収め、学校改革を体現する生徒が多数登場

2018年度に2年生で試行した「南区探究MSP」を管理職が、学校全体の継続的な教育活動に格上げ決定ができたのは、顕著な成長を遂げた生徒による実績が大きい。



北海道札幌市南区は同市の南西部に位置する広大な区だ。面積は全市域の約60%に及び、多くを山林が占める。人口136,397人(2020年8月1日現在)。大半は市街地に隣接するエリアに居住している。

販売当日の「真駒内ふゆあそび&ゆきまろしえ」では、50個限定で用意したアップルパイが開店からわずか21分で完売した。「高校生たちはこの経験から、『自分らしく社会に参加する』手応えを得たのだと思います。このような変化は、学校の中だけでは起きません」と同校教諭で「総合的な探究の時間」に取り組む長井翔さんは語る。では、藻岩高等学校が取り組んだ「総合

まもの課題解決を楽しむ姿が地域の人たちの心を動かした

結果、アップルパイと「食べ歩き文化」が重なり、楽しさと名店街の持続可能性とが結合。探究に動かし意味も深まり、夢中になって試作を繰り返した。

集う場」の頭文字で、「地元の笑顔や持続可能性向上のために考えて動く活動」という意味が込められている。(前回参照)では、生徒はどのような活動を通して成長したのか。また、学校や地域に何か変化があったのか。2019年度を象徴する事例を紹介したい。

そして、今年2月8日の「真駒内ふゆあそび&ゆきまろしえ」で販売することになった。店名は真駒内の「マコ」と、花言葉で「好奇心」を表す「オトメユリ」の「リ」から「M.A.C.O.R.Y」と命名。

この間、高校生たちは名店街に何度も足を運んだ。その中で、地下鉄真駒内駅から光塩学園女子短期大学へのルート上にある名店街では、学生たちがいつも素通りしていくことを知った。すぐさま、それが課題と気づいて解決策を探り、「食べ歩き文化」づくりとなった。

藻岩高等学校 2年生による「南区探究」の主なテーマ (2019年度)

テーマ	探究の目的と問い	探究の意義	探究の成果
ヒグマと共存するために	草刈りの大切さをみんなに知ってもらおう	草刈りをすればヒグマは出ないのではないか	●実際に草刈りを実施したことで、ヒグマの出没が大幅に減った
若者があふれるまちへ	なぜ真駒内には若者が少ないのか	真駒内に若者が少ない理由を説明することで真駒内の発展に必要なことがわかる	●仮説の通り、飲食店の不足も影響 ●道路沿いに集客力のある店が少ない ●地域の行事に参加する人数は、年齢が低いほど少なくなっている
頼る、頼られる空間へ (全ての人が平等で笑顔あふれるまちづくりを)	住民の壁をなくすには、どのようなことを行えばよいのか	例えば、育児に忙しく、自分の時間をつくれぬ人が気軽に近所の方に子どもを預けて、買い物に行けるよう住民同士、協力し合う機会をつくと喜ばれるのではないか	イベントを行ってわかったこと「〇〇さん~してくれない?」「〇〇さん~お願いします」など、周りの人に頼ったり、頼られたりする場面があり、常に皆が周りを見て行動し、協力し合っていた。みんな喜んでくれた
Moiwa Bousai Project (MBP)	防災対策の発信方法を見つけて利用し、対策の改善点や自分自身が今すぐに始められることを見つける	防災対策の発信方法の提案を発表することで、若い人と防災をつなぐきっかけになる	●南区に多い土砂災害については、特別の防災システムは未整備だった ●藻岩高等学校の教職員を対象にした防災意識に関するアンケートによれば、自発的な情報収集の手段はインターネットと判明。スマートフォンへの防災情報を発信するのが有効とわかった

藻岩高等学校の生徒たちは、地域の「smile」や「sustainable」を意識し、目的や意義を明らかにして、プロジェクトを行った。机上の提案に終わらず、現場に出て行動し、仮説の検証を行った点が意義深い。

まちを心から楽しみ、課題解決にも貢献。新たな価値を共創する人物を育て上げる学習

—市立札幌藻岩高等学校の取り組み(下)—

浦崎太郎 大正大学地域創生学部教授

地域で「自分らしく社会に参加する」きっかけをつかんで活動し、多くの共感を集めて、進路が変わる生徒さえ現れた市立札幌藻岩高等学校。都市部の進学校が加わらずに地元の持続可能性は高まるのか。前回に引き続き、「進学校の常識」を問う、同校の挑戦と実績を紹介する。

写真提供 ● 市立札幌藻岩高等学校

市立札幌藻岩高等学校は、札幌市南区にある各学年8クラス規模の普通科進学校だ。そう聞くと、誰もが「地域連携や探究とは最も縁が薄い高校」と想起するに相違ない。しかし同校は、そうしたイメージを軽やかに超える教育活動を展開している。

同校は2018年度、2年生の「総合的な探究の時間」で「南区探究MSP」(以下、MSP)を試行。その手応えを得て、2019年度からは年間計画に位置づけて実施している。MSPのMは「藻岩・南区」を表し、Sは「Smile(笑顔)・Sustainable(持続可能)」、Pは「Project(計画)・Platform(人々が

町内会主催の輪投げ大会の様子。野球部生徒が参加し、会場は大盛況。



「南区探究MSP」初年度のフィールドワークの様子。子育て・福祉をテーマに探究した。



的な探究の時間」の全体計画はどのようになっているのか。

1年生は「実体験を通して社会に目を向ける」といったその土台を丁寧に構築する。2年生では、MSPを通して社会の一員として、地域の課題解決に向けたアイデアを共創する。そして3年生では、「持続可能な社会とそれを担う自己の未来を描き、行動する」。(下図参照)

このようにして3年間を丁寧に積み上げていけば、無理なく「持続可能な社会の実現に向けて新たな価値を共創できる人物」を育て上げ、社会へ送り出すことができる。「3年間の計画に確信を持たせたのは、ある交流会で生徒が自己紹介を求められたとき、名前を告げる程度と想像していたところ、再編した総合探究を経験した3年生が「将来〇〇の道に進んで、SDGsの〇番を実現したい」と熱く語ったんです。その姿に、私や参加していた大学関係者は驚きと感動を覚えました」(長井さん)

では、地域はMSPをどう捉えているのか。地域の変化について、「MACOR」を見守ったまちづくりコーディネーターの林匡宏さんは、次のように語る。「スイーツが完売したのは、高校生がまちの課題解決を楽しむ姿に地域の人たちが心を動かされた証です。その様子を見て「教

育×まちづくり」に可能性を感じました」

「探究」はどうなったのか

こうした希望が見えた矢先に新型コロナウイルス感染症が拡大。授業時間数の大幅減少で、多くの高校は探究や地域連携を先送りしたが、同校の取った方針は違った。コロナ禍に起因する地域課題に着目させる形で、迅速に軌道修正を図ったのだ。

「驚いたことには、夏休み前なのに『こんなことをやりたい』と申請書を提出する生徒が現れました。コロナ禍を超えて、探究が学校の文化になっていくのを感じています」(長井さん)

「総合的な探究の時間」の経験があったからこそ、生徒たちは地域に興味を示し、地域が抱える問題を掘り起こし、課題解決へと貢献することができた。これは、単に札幌のローカルエリアの話ではない。ほかの都市部の大規模な進学校の生徒にも、同様の学びを届けるべきだと考える。

藻岩高校の実績を見るにつけ、ほかの進学校で変革が進まないのは、本当に不可能だからなのか、それとも誰かの怠慢によるものなのか、問わざるをえない。

筆者は藻岩高校の挑戦が、広く波及することを願ってやまない。

Taro Urasaki

1965年岐阜県生まれ。岐阜県内で高校教師として学校と地域の連携について実践的に研究。2017年4月に大正大学地域構想研究所教授、20年4月より現職。地域創生学部で実習企画や学生指導を担いつつ、高校と地域が連携して人材育成と地元回帰を推進する仕組みの普及に尽力。文部科学省中央教育審議会学校地域協働部会専門委員を務めた。

オンラインに切り替えた2年生の「南区探究MSP」(2020年度)

2020年5月8日に提示された探究課題

新型コロナウイルスの感染拡大が高校生にも地域にも深刻な影響を及ぼしていることから、「南区探究MSP」でも「新型コロナウイルスに起因する社会現象から感じたこと」を手掛かりに課題を設定し、地域社会の一員として課題解決に向けたアイデアを考えることにする

探究の手順

- STEP 1** 新型コロナウイルスによって家族や友人など身近な人の日常(生活や仕事など)にどのような変化が起きたか、思い浮かんだことを書き出す
- STEP 2** 新型コロナウイルスによって自分の生活圏(住む地域)にどのような変化が起きたか、思い浮かんだことを書き出す
- STEP 3** STEP1・2を踏まえて、新型コロナウイルスによって自分の生活圏に生じているさまざまな問題の中で、最も関心のあることや解決したいことは何かを考える
- STEP 4** STEP3が生じた要因は何かを考え、できるだけたくさん、かつ具体的に内容を書く(図やイラストで表現してもよい)
- STEP 5** STEP4を踏まえ、STEP3に対して今の自分(高校生)でもできること、今の自分だから暮らしの中でできることを考えてみる

藻岩高等学校の探究計画は、コロナ禍で後退するどころか、地域課題に対する生徒の当事者性を高める絶好の素材となった。機動的に取り込み、当初計画より前進。ピンチをチャンスに変えることに成功した。



C O L U M N

「南区探究MSP」から得られたこと

学校がある札幌市南区を題材に探究的な学習に取り組む高校生や関係者は、どのようなことを学んだのか。

地域の人が不安を吹き飛ばしてくれた

ながい かける
長井 翔さん
市立札幌藻岩高等学校教諭
探究委員会委員長



生徒に感動と刺激をもらった

はやしまさひろ
林 匡宏さん
Commons fun代表



まちの文化を目指し 今後も活動を続ける

たけだ まい
竹田真唯さん
市立札幌藻岩高等学校3年生



私の役割は、先駆者がゼロから地域の人たちと対話を積み重ねてつくったつながりの価値を学校として紡いでいくことでした。不安で悩むことばかりでしたが、伴走者である地域の皆さんとの出会いが「ワクワクの連鎖」となり、それらを吹き飛ばしてくれました。これからも生徒と一緒にミライへの希望の光を灯します。

最初は緊張していた生徒たちが、企画会議に参加し、考えを発表することで地域の人からも指摘を受け、たくましくなっていました。特に自分たちのやるべきことが明確になってからの行動力はものすごく、地域の食材を生かしたスイーツ開発をどんどん進めました。「MACORI」での活動に地域の大人は感動し、心地よい刺激をもらったと思います。

真駒内上町で活動する中で、近隣の大学生がまちの魅力を知らずにすぐ帰ってしまうことを知り、大学生が気軽に寄れる「食べ歩き文化」をつくらうと思いました。南区産の美味しいリンゴを使ったアップルパイをカフェで販売してみたら、大学生や高齢者の方の来店があり、一つのきっかけを感じました。これが文化になるよう今後も活動を続けていきます。



1 多世代・異世代交流の場「むくどりホーム」で、ミニホットケーキづくりのイベントを実施。2,3 地域の国営公園に若者の来場者を増やすために考案したインスタ映えするハート形ベンチ。実際に制作・展示された。



藻岩高等学校「総合的な探究の時間」全体計画 (2020年度の当初計画)

全体テーマ 未来に向けた新たな価値を共創する ～持続可能な社会に向けて～

時間を惜しんで形だけの「探究」を行う進学校が多い中、藻岩高等学校の探究はゴールが明確であり、3年かけて無理なく積み上げていけるよう緻密に設計されているのが特徴だ。

	1年	2年	3年
学年テーマ	実体験を通して社会に目を向ける	社会の一員として、地域の課題解決に向けたアイデアを共創する	持続可能な社会とそれを担う自己の未来を描き、行動する
目標	<ul style="list-style-type: none"> 見る・聴く・質問するという「体験」を通して、社会に対する関心を高める 「体験」を通して、「なぜ?」の問いを持ち、質問する姿勢を育む 協働的な学びを通して、「体験」をまとめ、表現する力を高める 	<ul style="list-style-type: none"> 社会問題を身近な問題と捉え、解決する能力を身に付ける キャリア教育(特に就業体験)の視点から、社会や地域と連携した体験的学習を通して、新たな課題発見とその解決に挑戦する 仲間と協働して解決策を共創し、よりよい社会を実現しようとする態度を養う 	<ul style="list-style-type: none"> 持続可能な地域・世界・社会の未来を描く 未来を担う自分自身を描く 描いた未来に向けて、現状の自己分析から課題を定め、行動する
スケジュール	<p>探究基礎 (4~7月) 「問い立て」「思考整理」の技能を磨く</p> <p>北大講座 (7~11月) 大学の研究・調査を「体験」する</p> <p>「南区探究MSP」の基礎 (12~翌年3月)</p> <ul style="list-style-type: none"> SDGsを学びながら世界や地域の課題に当事者意識を持ち、課題解決に向けたアイデアを共創する 2年生の「南区探究MSP」の発表会を聞いて、次年度のイメージを持つ 	<p>南区探究MSP</p> <p>STAGE 1 (導入期) (4~6月)</p> <ul style="list-style-type: none"> 南区の課題を発見する(テーマ別講演会) <p>STAGE 2 (展開期) (7~9月)</p> <ul style="list-style-type: none"> フィールドワーク(FW)を通して課題を明確化し、解決のアイデアを練り直す <p>STAGE 3 (まとめ期) (10~翌年3月)</p> <ul style="list-style-type: none"> 活動をまとめ、発表の準備をする 「南区探究MSP」の発表会で具体化した解決策を報告する 	<p>ミライ (=未来) design (4~12月)</p> <p>STAGE 1 (持続可能なミライを描く)</p> <ul style="list-style-type: none"> 働き方を想像×創造 → FW(調査) <p>STAGE 2 (自分自身のミライを描く)</p> <ul style="list-style-type: none"> 仕事図鑑の作成(FWのまとめ) 自身の働き方を想像×創造する <p>STAGE 3 (ミライに向けて行動する)</p> <ul style="list-style-type: none"> デザインしたミライに向けて課題を設定し、解決策を考えて行動する